



德川實記抄錄  
 卷一  
 德川實記抄錄  
 卷一  
 德川實記抄錄  
 卷一

特別  
 25  
 2142  
 1



德川實記抄錄

早大  
藏  
圖書  
第六

平  
書  
目  
録  
冊  
録

附

大猷院殿御實紀卷末

卷中八十一記之御實紀  
有德院殿御實紀

常憲院殿御實紀卷末

文昭院殿御實紀卷末

文廟全條

文昭院殿御實紀附錄上下

松平美濃守吉保御登庸

有章院殿御實紀卷末

有章院殿御實紀附錄

有德院殿御實紀卷末

文廟章廟御附錄

伊予門  
番 2147  
卷 1 五



室永六年己丑

三月十日の酒場とありて其の事よりいふに其の下の筆は  
さうのりさきふお別れあうふ酒場先達あたりせしむ  
に宿せり其のふさぎ難言すといふことせしむしむ  
老に表るる筆は酒場とありて其の事よりいふに  
大御言ぬるお袖につゆさ行遣言ぬるしむを曉後  
おはゆはのまき時あつて堅致悲傷しむと違ふと  
おはゆはのまき時あつて堅致悲傷しむと違ふと  
おのこすい酒場とありて其の事よりいふに  
おのこすい酒場とありて其の事よりいふに  
おのこすい酒場とありて其の事よりいふに  
おのこすい酒場とありて其の事よりいふに  
おのこすい酒場とありて其の事よりいふに  
おのこすい酒場とありて其の事よりいふに  
おのこすい酒場とありて其の事よりいふに  
おのこすい酒場とありて其の事よりいふに  
おのこすい酒場とありて其の事よりいふに  
おのこすい酒場とありて其の事よりいふに

明  
● 年 月 日  
林 鐘 三 助 氏 寄 贈



宣旨付てをやくと医友ともよりの行脚をくわひしるを  
邦の極といふやとやあるふとや終るこよは皆極地なりと  
之く又行と聞のふまじしはしを居らざらばはよりの極地  
ありあふ事極度し所はてとまをたけりて懸傷せし事極  
さ極しきまの事ありし極の極なりとてしるはし  
こころの極なりといふふも所をくはししもの極なりと  
せし極の極なり極の極の極を極せんといふらふ事あり

二月朔日胎所昇曼荼羅供二日之法華八講  
有落戒の法華之味七日法華經抄字七の極供長  
八百道法或九の令別昇曼荼羅供十日極供十  
一切法轉讀十の令曼荼羅供十一の極供十一  
宣のよき行の道なりし極供十二の極供十二  
公よりしよと道極供十三の極供十三  
平初の極供十四の極供十四  
極供十五の極供十五  
極供十六の極供十六  
極供十七の極供十七  
極供十八の極供十八  
極供十九の極供十九  
極供二十の極供二十

二月朔日胎所昇曼荼羅供二日之法華八講  
有落戒の法華之味七日法華經抄字七の極供長  
八百道法或九の令別昇曼荼羅供十日極供十  
一切法轉讀十の令曼荼羅供十一の極供十一  
宣のよき行の道なりし極供十二の極供十二  
公よりしよと道極供十三の極供十三  
平初の極供十四の極供十四  
極供十五の極供十五  
極供十六の極供十六  
極供十七の極供十七  
極供十八の極供十八  
極供十九の極供十九  
極供二十の極供二十

大慈河を渡る石橋の跡に傳はれ大慈河に傳は  
る

常憲院殿御實記卷末

そと人君天下を統治しその御賞を討てのこ  
そは美顔の御いひくまふなり  
我朝帝王此の年をまはるるふ 文徳天皇崩す  
法知天皇と御言ふや帝位よりの御いひくまふ大慈河を  
渡る御言ふと御言ふと御言ふと御言ふと御言ふ  
大慈河の事言ふる氏の言ふに 大慈河の御言ふ  
中よ意持して御言ふるの御言ふる御言ふる御言ふる

所はなほに、後三條院北条の英畧ありし由、  
や、揚子の権を割るゝの事、  
あし、  
多羽、白河の事、  
治政の政をなす  
治政の事、  
代り、  
創らば、  
御家の権を、  
北條氏、  
北條氏、

王以下、  
知れ、  
あり、  
らば、  
ひ、  
行、  
する、  
る、



後蕃の程何より、  
神皇の英武ともて、  
佐々の功臣は、  
富を合くし、  
身誠して、  
農者院殿、  
より、  
多を、

御番任あり、  
か、  
その、  
あり、  
あ、  
志、  
宗、

色が輝くこと著しく制位を重んじたいに紀録大いなる  
い海に書きたることをいふに記すに記すに記すに記す  
峻厳なるものゝ如くに賞賜とらぬ群衆を授け  
かゝるものと古くふこの時代より整へるなり城内府  
西後、近年、河津も古儀、物理、信はも成良、むを同儀書  
宗賢とすむ、河津も古儀、物理、信はも成良、むを同儀書  
地をを治し、いひ、又いふ、河津も古儀、物理、信はも成良、むを同儀書  
せらるゝもの、河津も古儀、物理、信はも成良、むを同儀書

かへ財宝を所へ、いひ、又いふ、河津も古儀、物理、信はも成良、むを同儀書  
三十年の月、河津も古儀、物理、信はも成良、むを同儀書  
行せ、河津も古儀、物理、信はも成良、むを同儀書  
そ、いひ、河津も古儀、物理、信はも成良、むを同儀書  
て、河津も古儀、物理、信はも成良、むを同儀書  
河津も古儀、物理、信はも成良、むを同儀書  
河津も古儀、物理、信はも成良、むを同儀書  
河津も古儀、物理、信はも成良、むを同儀書  
河津も古儀、物理、信はも成良、むを同儀書  
河津も古儀、物理、信はも成良、むを同儀書



由するをこの虚理の心とよせらば、浮屠の呪詛を  
好む、僧尼の輩、多く寵眷を蒙り、遠く儒教の徳を  
敬ぶ、人をそとを厭う、あつて、又、後業をこゝみ  
ぬ、その業、工、多す、とて、擢用せらば、と、極をけり、と、  
これ、この事をもて、後世をなげ、その事、これ、又  
秦皇、漢武、唐明皇なり、神仙方士をもて、梨園  
子弟をもて、こゝみ、教、中、非常の思、と、や、と、  
か、この事、あ、智、と、後世の人、と、法、と、作、業、と、の、事、

事、この事、ゆ、と、い、と、と、よ、と、い、る、者、庸、と、い、の、事、  
か、この事、と、ゆ、と、い、と、い、よ、と、い、る、と、と、と、と、と、と、  
英、賢、雄、才、れ、一、行、と、志、と、い、と、い、と、い、の、事、  
つ、と、い、の、い、儒、生、と、優、待、せ、り、と、い、の、事、と、い、た、す、と、  
所、臨、と、志、と、い、と、い、と、い、と、い、た、ふ、と、い、の、事、  
か、この事、と、い、の、事、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、  
は、失、を、端、し、後、世、の、事、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、

そとく人の徳の徳の断りたる大なるに於ては公の弱  
敷く海書又歴を好む人の儒生を何處の民間に  
徴用せらば常と接を以ての歴史を討議し申  
すしそとのそとのにそよと潜部より何す日之久を  
しそとのの勤若<sup>後祖</sup>ち民の夜苦を忘るべし一若代のを  
年程をそとのそと一難と固しそとのそとの威福をそとの  
厚歎を載して海内虚耗を以てそとの所をけを  
ゆい大統を以てそとのそとの言をそとのそとの所

やそとの権威を以てそとの年を以て所教の禁をのそとの大  
海を以て賦歎を以てそとのそとの徳を以てそとの所局の弊習  
を以て察し群臣の怠惰を以てそとの所志を以てそとの  
韓聘の由り新井海法を君より一委任有り和漢を拓  
して一代の典礼を以てそとのそとのそとの所を以てそとの  
胡舎座を以てそとのそとのそとの所を以てそとの所を  
以てそとの所を以てそとのそとのそとの所を以てそとの所を  
以てそとの所を以てそとのそとのそとの所を以てそとの所を  
以てそとの所を以てそとのそとのそとの所を以てそとの所を



文昭院殿所實紀附録卷上  
好文章の...  
文...  
代...  
...

文昭院殿所實紀附録卷上

文昭院<sup>殿</sup>潜<sup>殿</sup>部<sup>殿</sup>不<sup>殿</sup>向<sup>殿</sup>...  
下<sup>殿</sup>段<sup>殿</sup>の<sup>殿</sup>江<sup>殿</sup>失<sup>殿</sup>利<sup>殿</sup>害<sup>殿</sup>と<sup>殿</sup>ん<sup>殿</sup>と<sup>殿</sup>わ<sup>殿</sup>り<sup>殿</sup>...  
文<sup>殿</sup>学<sup>殿</sup>の<sup>殿</sup>志<sup>殿</sup>篤<sup>殿</sup>く<sup>殿</sup>...  
江<sup>殿</sup>の<sup>殿</sup>海<sup>殿</sup>風<sup>殿</sup>...  
籍<sup>殿</sup>と<sup>殿</sup>ん<sup>殿</sup>あ<sup>殿</sup>る<sup>殿</sup>...  
の<sup>殿</sup>書<sup>殿</sup>生<sup>殿</sup>を<sup>殿</sup>側<sup>殿</sup>陋<sup>殿</sup>...  
四<sup>殿</sup>書<sup>殿</sup>小<sup>殿</sup>学<sup>殿</sup>を<sup>殿</sup>恩<sup>殿</sup>禄<sup>殿</sup>...







新井君受の諸女侍りし時、風の吹く地りりして、  
に鼻水の吹く風ひりしをひりしに例ふじひて、  
紙より出紙せたまひて、又海老のめさむらせぬ  
鳥の身を海のものに、威儀の恭格にまはるは、  
清きりし河を、お静まへりしと云、  
元禄十一年十月、地影しく震ひて、火事よ起りぬ、  
公潜部のおねりや、大塚より酒井左衛門尉右衛門清俊  
して、大塚あつて、せぬかきうし、作ふとの時、  
三

此供せしとて、皆草履をたたの種あひ、立さ海より、  
ひきとて、作ふとて、我のりき所上程の花ん、  
まこれし世病を見しに、似つるを、作ふして、  
給ひし、君受の、おまきん、まき、  
有しと云、  
日と

加原紙中明美、若代より、お光り、さ海、  
人ありし、公に儲副に定まると、海に、  
大塚あつて、せぬかきうし、作ふとの時、  
同部

越后守修房が拜みつられた。魚把守といふ文章あり、  
 のまのぬ、唯々見えあはし、西城殿舎の国より、あはれ後  
 へいとき、終り、沖心路にもあり、信をむと遠くしとあり。  
 この時立備の儀、等に作せし、所、誰ともおかりしり。  
 その明日西城へ所迄の儀、作せられた。公におきて、御件  
 あり、西東あり、まゝし、たてたき、あはし、の事、お終り、二身  
 為と申りん、しと、大臣の種を先ひ、所被、逐念の、不  
 成り、ものと作あり、浄事、しと、おかり、是より、しと

御件、おと、しと、はせ、た、ま、す、は、お、あ、り、し、明、美、と、は、る、ま、と  
 恥、志、あ、ら、し、や、面、も、く、繁、栄、の、條、お、繁、ね、し、と、ま、り、

ことし、萬山、廣澤、秘策

公、改、小、備、副、小、立、せ、終、ひ、西、城、と、所、終、り、し、日、新、井  
 君、更、い、後、邸、お、地、あり、し、越、前、守、修、房、お、向、て、つ、ひ  
 あり、今、より、後、我、志、を、下、を、治、ま、せ、終、り、し、と、な、れ  
 か、一、年、は、な、し、み、け、な、し、い、つ、も、ま、り、い、ふ、は、ら、た、る、ま、り  
 今、より、し、と、ま、り、は、な、し、し、た、ま、り、た、り、し、と、ま、り、万、山、の、氏、の



け禁除らるるに於ては海内を盡くす者まわつては  
に宣ひしに在保も元よりはしむるにあらざりしに  
世にあらざりしにあらざりしにあらざりしにあらざりしに  
有徳の徳を存せしむるにあらざりしにあらざりしに  
華をも徳くすに宣ひしにあらざりしにあらざりしに  
たまたまにあらざりしにあらざりしにあらざりしに  
紙も亦違ふとあらざりしにあらざりしにあらざりしに  
こと万民の徳にあらざりしにあらざりしにあらざりしに

にあらざりしにあらざりしにあらざりしにあらざりしに  
けあらざりしにあらざりしにあらざりしにあらざりしに  
のあらざりしにあらざりしにあらざりしにあらざりしに  
けあらざりしにあらざりしにあらざりしにあらざりしに  
寵眷を蒙りしにあらざりしにあらざりしにあらざりしに  
もあらざりしにあらざりしにあらざりしにあらざりしに  
ぬけあらざりしにあらざりしにあらざりしにあらざりしに  
ちけあらざりしにあらざりしにあらざりしにあらざりしに



茶朝の時大後としつゝいひてあつた海りかゝりて  
しつゝ、口氏用ふる使ふかゝりてあつた海りかゝりて  
しつゝいひて、教刑をさしつゝいひて、教法をせしつゝいひて  
ふふふ事のおより、商人等通行するに便せしつゝいひて  
らすしつゝいひての催使志をさしつゝいひて、所継続のしつゝいひて  
ふふふ年正月のしつゝいひては、禁と除くこと、又飯田町の民を  
と他ふより移すしつゝいひて、口氏若しつゝいひてあつた  
あつた時、禁と除くこと、代法を改めしつゝいひて

田原に弊習をたし、維新の政を施すしつゝいひて  
あつたしつゝいひて

前期の時、公費莫大なり、所継続れしつゝいひて、西向  
支へたしつゝいひて、老臣等、前期のしつゝいひて、金銀改  
法を定むるしつゝいひて、あつたしつゝいひて、に在るは、いふしつゝいひて  
そのおとより、あつたしつゝいひて、貞徳のしつゝいひて、あつたしつゝいひて、  
その御しつゝいひて、あつたしつゝいひて、あつたしつゝいひて、あつたしつゝいひて、  
の大震りしつゝいひて、城壁の破壊せしつゝいひて、所継続のしつゝいひて、あつたしつゝいひて

此ののむねをいひて一昨日の事なりしをいひて  
まかりし事なりしをいひてその事なりしをいひて  
まかりし事なりしをいひてその事なりしをいひて  
まかりし事なりしをいひてその事なりしをいひて  
まかりし事なりしをいひてその事なりしをいひて

一昨日の事なりしをいひてその事なりしをいひて  
まかりし事なりしをいひてその事なりしをいひて  
まかりし事なりしをいひてその事なりしをいひて  
まかりし事なりしをいひてその事なりしをいひて  
まかりし事なりしをいひてその事なりしをいひて

あつて一昨日の事なりしをいひてその事なりしをいひて  
まかりし事なりしをいひてその事なりしをいひて  
まかりし事なりしをいひてその事なりしをいひて  
まかりし事なりしをいひてその事なりしをいひて  
まかりし事なりしをいひてその事なりしをいひて  
まかりし事なりしをいひてその事なりしをいひて  
まかりし事なりしをいひてその事なりしをいひて  
まかりし事なりしをいひてその事なりしをいひて  
まかりし事なりしをいひてその事なりしをいひて  
まかりし事なりしをいひてその事なりしをいひて

新撰書 春海秘策







そのあきしゆりねいよとて諸と飛りうらふはとをば  
月いほしあつふら ちいさしゆりして 神のあはれ  
あつね ねいよいよふれ年みすすしては事これ  
ないつふあきあひのしゆりあつねのあはれをすす  
寛裕慈仁あきしゆりあつねのあはれ

万石以上の軍をき比とありては 新石討の後 敵討す  
せしゆりあつねのあはれ 神のあはれ 二月今よる  
後万石以上のあつねのあはれ 神のあはれ 神のあはれ

そのあきしゆりねいよとて諸と飛りうらふはとをば  
月いほしあつふら ちいさしゆりして 神のあはれ  
あつね ねいよいよふれ年みすすしては事これ  
ないつふあきあひのしゆりあつねのあはれをすす

女日記 拍燈堂

そのあきしゆりねいよとて諸と飛りうらふはとをば  
月いほしあつふら ちいさしゆりして 神のあはれ  
あつね ねいよいよふれ年みすすしては事これ  
ないつふあきあひのしゆりあつねのあはれをすす









車石の領ちりされしもの方、百年の久遠を淨て  
之を更らば是れ亦すもて、代々授意かうふさうしり  
尚代のもしめ、新令を頒ち下さうしり、ちる際おち  
政事不存しり、司らりし先、林太郎の信爲、及び新井  
高之代君、及ぶ、草しく奉らりし、さう思ふ、草せし、と、司  
ら、司ら、草せし、と、草せし、と、草せし、と、草せし、と、  
さうしりし、と、さうしりし、と、さうしりし、と、さうしりし、と、  
司ら、草せし、と、草せし、と、草せし、と、草せし、と、

一事、皇家の成目、さうしりし、と、草せし、と、  
わ、さうしりし、と、草せし、と、草せし、と、草せし、と、  
ら、と、草せし、と、草せし、と、草せし、と、草せし、と、  
公、さうしりし、と、草せし、と、草せし、と、草せし、と、  
近、さうしりし、と、草せし、と、草せし、と、草せし、と、  
し、と、草せし、と、草せし、と、草せし、と、草せし、と、  
後、さうしりし、と、草せし、と、草せし、と、草せし、と、  
は、さうしりし、と、草せし、と、草せし、と、草せし、と、



大悪人なり流石ゆゑに其書の海を渡らん一かたまり  
かゝり汁液なりて朝倉家の存亡を断つて一  
紙の制をなされ者も流石なるものとも後世の  
新井忠貞のみならず一と云はれしは流石なり  
ありと仰ししと然 はとる部記

最期の時流石とてゆゑ管徳は折れず舞妓りて行  
互ふりしをあらうしと云ふも 流石と云ふも  
と云ふに改らぬ流石なるにのち 流石と云ふも

一と云ふ新井忠貞の流石なりと云ふも 流石  
も流石なる物なりと云ふも 流石  
其事は流石なりと云ふも 流石  
其書を流石なりと云ふも 流石  
まゝなりと云ふも 流石

秘策

當代のそと天朝と云ふ事一は流石なりと云ふも  
七年十月申内門院即位の時公は流石の神と

して持ちまして張と云ねとらりし月と書きの  
書して此に謝し候ひる事

涙の所願いしは後日にすめせのひと云うの  
ありし時代りやなまひし後を任じ候ひるを  
おのの言ひしはしるしと云ふは  
ひろくあるは月日は國を村に  
あつらひしはしるしと云ふは  
清き水に流るるはしるしと云ふは

の痛苦と流るるはしるしと云ふは  
君とのしるしと云ふは九月公に  
その所願と云ふはしるしと云ふは  
の御ありし公にみよと云ふは  
都をのしるしと云ふは今日  
松本大御言宗歌に流るるはしるしと云ふは  
と云ふはしるしと云ふは  
流るるはしるしと云ふは



吾道を研鑽し、あひに代つるをたしむる事ありき  
そは、かゝる者とも、あつたり、授擢せらるるを、  
深見玄悦、貞恒、七傳の、  
しう、新志、多の、  
之を、九子、師、  
由法、  
君、  
が、

ふ、  
古今、  
公、  
よ、  
の、  
結、  
く、  
こ、

よの佳岡の女房もては、文のよめを尋ねて、  
せとむし年久しくはなまらうとて、若くは  
傳へ給ひし、傳藏信

沙羅人の武技を評して、  
官長のつ園するもの、急快にぬけ、  
或はの田も、  
比このより、  
鳥とて、

鷹賜行の道に、  
研給する事、  
所希ありて、  
忠節父子の剣技、  
又そのあり、  
せしを、  
扇ま、  
あふの





弘化二年乙巳清和月下院八日早了日無二間  
雙抄記於昌平學館

諫訪頼移

文昭院殿御實記附録卷下

寶永七年八月

東山院若宮

秀宮詳直仁

親王宣下此事仰ひ出振宮詳

登降此事多へ仰つふされて御定行りこしたその  
久みえ亭建武の比皇統南やありか也南經り初とり  
給ふるひ朝の武家のこめ不擁立せらるる居ひら  
應仁よりこのめこ富河殿軍國の位を失りて一度  
御家を襲ひ氣するるを以て朝家をあり衰弊し





にして去人産業をこころふより一併ふはるる。張氏の  
若宮の仲とされしことも名西州の長年これ滅して  
事ゆらば正徳三年にあり。長崎の若く互市行はる  
あり。唐人を執中及海上にて私販し。去りしきや  
てい上陸して私販をや。土人割せんすれど無恐る  
銃より劫すより。去りしきや。その年五月  
制令をとりし。唐人の事を論され。又西海流大石  
に蕃船の私販をすもの。その船をせき。人を斬殺し。

我船の私販をすもの。一擲捕へ。と。裁ふ作下され  
り。それらある年正月。海船互市に新例を定め。而も  
作下され。船長の威類をけり。唐蘭西蘭の定法  
に。これら。度元。東の四弊を一洗し。あひけは  
こ。私販の。後。危。後。所。遺。志。を。継。ぐ。  
か。新。例。を。し。あ。り。折。檻。等。

韓聘乃儀。當代めて。愛せらる。其。長。元。知。の。吏。聘  
の。當。家。子。割。の。こ。ま。り。は。て。い。は。れ。私。を。獲。す。は。る。は。ん。















粟中筑後の三池の三宅、侍中の上房の上方、賀陽の  
筑夜大和の武上名の城、下、信濃北更科の更級、  
伊予の伊那、輝新の輝方、相模の陶隆、熊後上野の  
縁整の縁光、筑前筑後、筑後の筑前、上総北  
夷隅の夷瀧、周<sup>須、周准</sup>下野の垣谷、筑前筑後の相栗、  
常陸河内、安富郡の安富、滋皮の滋川、和泉の泉、  
和泉豊後の國東、國崎、播磨の加藤、和泉後河の  
有海、有海、阿部、阿部、益頭、益頭、益頭、益頭、

作出さる、これに正徳二年二月のよりあり、  
佐伯を討つ、佐伯より、和泉を討つ、和泉を討つ、  
一人として、佐伯を討つ、佐伯を討つ、佐伯を討つ、  
二人を討つ、目付河内、和泉、和泉、和泉、和泉、  
長治、長治、長治、長治、長治、長治、長治、長治、  
年、月、日、年、月、日、年、月、日、年、月、日、  
結連、結連、結連、結連、結連、結連、結連、結連、  
色、色、色、色、色、色、色、色、





奇福ありて人言ふんまり、尾は敏西城ふれり、一、方  
 機を搦たり、一、ひ、と、ふ、幸、を、我、子、を、ま、い、り、に、  
 尾は敏西より、 林統を交りて、い、ま、や、こ、の、の、西、  
 一、行、つ、ま、さ、る、ん、と、魚、一、と、あ、り、皇、天、子、も、一、い、  
 甲、の、を、あ、れ、ま、い、り、つ、子、よ、あ、い、い、あ、あ、あ、い、  
 り、ま、い、天、中、れ、ま、い、り、あ、い、ま、い、り、あ、い、ま、い、り、あ、い、  
い、ま、い、り、ま、い、り、あ、い、り、あ、い、り、あ、い、り、あ、い、  
 魚、一、と、魚、一、と、魚、一、と、魚、一、と、魚、一、と、魚、一、と、

台徳院殿、鑑城殿

大猷院殿、鑑河屋、これとの所、あ、い、う、て、作、る、を、ま、い、り、  
 人、不、志、つ、ま、い、り、い、ま、い、り、あ、い、り、あ、い、り、あ、い、  
 一、ゆ、ま、ぬ、お、尾、徒、の、ま、い、ら、う、と、い、ま、い、り、あ、い、り、  
 一、あ、い、の、中、ま、い、り、あ、い、り、あ、い、り、あ、い、り、  
 一、こ、の、い、ま、い、り、あ、い、り、あ、い、り、あ、い、り、  
 一、應、仁、の、此、の、ま、い、り、あ、い、り、あ、い、り、あ、い、り、  
 一、祖、宗、の、此、の、ま、い、り、あ、い、り、あ、い、り、あ、い、り、

中二 神懸けの事いさむ 佳例ありしゆらば 羣臣  
らうわして侍らんよ 若君所世を侍りし何の  
事うさかす少きことなせしやうり 重て侍りし知弱  
乃若く水とれ沈のさしし 一とさしし後 福智の  
けりあふんよいふすしやや侍りしよ 神懸の  
こととさししむひのわらふ所のさるるししゆら  
も侍りしよ 若せしよわらふのさししよとひしよら  
まも一病いえし後 若ひしあはれい 後種ふとさし

此世と侍りし 遠く起すや 女侍のねえいし 神懸  
むゆりし 五年ふ終 折焼屋

新井忍良らば けりし侍をを侍りし 後 三代の侍ら  
上の経代 聖良あまを侍りし 其風もなれ かつりし 若侍  
を聞き 後代も侍りし かくれ 酒場中より けりし 若侍  
婦とあせりし 若侍 此風侍 若侍 男子の髪の色 若  
より 若侍の物ありし 若侍 所の御儀を擬し 女子此風  
より 若侍の娼妓をまかりし 其の極し 若侍 若侍

凡てこれ浸淫せしむるを以て其の害は甚しきなり  
其の初めは文王の徳化に固門たるを以て漢北  
名はて及びし者其を徳の弊こそ多く徳化を以て  
此れ如くしてせしむるは徳化の弊こそ多く徳化を以て  
先務より新劇なりと云ふもの哀れなるを以て徳化  
男と感徳を流すもの事は浸淫の弊の多しと云ふ  
めをその感するに事なりと云ふもの事なりと云ふもの  
の徳化を以て其の弊は甚しきなりと云ふもの事なりと云ふもの

はくは浸淫の弊は甚しきなりと云ふもの事なりと云ふもの  
唐紹を以て其の弊は甚しきなりと云ふもの事なりと云ふもの  
仰つては公此常に徳化を好まされば徳化の弊は甚しきなり  
と云ふもの事なりと云ふもの事なりと云ふもの事なりと云ふもの  
魏揚の如くありしことなり 魏揚の如くありしことなり  
公此後之潛部にれませし時を漢の後帝の如く徳化の弊  
事とせばありしことなり 徳化の弊は甚しきなりと云ふもの  
公此後之潛部にれませし時を漢の後帝の如く徳化の弊

志願して著述し、己を稱す四年正月の比、新井君貞に  
仰せられたる十九年<sup>三月</sup>喜めて著す、ぬその書其を七年  
に刊し、是、地寶八年の著、元々十年の著、都く其計、  
製成、及ぶ、唐陰、多し、著す、と三百三十七家、四編  
十卷、防活二巻、九例、月録六小一巻、合計十三巻、及び世冊  
と著す、著す、ぬ、公行、覽し、その書、れ、名、を、い、り、み、り  
から、藩、翰、後、に、題、せ、ら、る、この書、つ、其、書、年、は、小、成、功  
せ、る、採、編、か、つ、は、と、り、も、百、年、は、後、に、著、す、ぬ、和

各家の著述を、い、ら、ん、と、い、ふ、ま、り、其、の、書、は、後、に  
か、つ、こ、し、う、ら、り、ら、ぬ、公、好、文、は、總、括、す、非、は、つ、ら、り、ら、ぬ

卯、折、覽、景

我邦、同、藩、の、つ、い、れ、古、事、紀、神、代、迄、の、志、を、い、こ、と、し、  
佐、述、不、徒、か、つ、り、其、書、の、後、に、一、き、み、り、に、れ、君、貞  
に、仰、せ、し、ま、り、つ、く、書、志、を、い、こ、と、し、と、り、の、い、り、の、古、史  
を、著、し、或、同、合、せ、し、十、卷、と、り、い、ら、ぬ、著、す、ぬ、思、ひ、  
著、せ、し、後、史、餘、編、も、其、書、を、著、す、ぬ、其、の、比、後、述、す、ぬ、い

本邦古来此法乱盛衰を以て編せしむる事業にせし  
しものこと也。 後史館編 皇太子簡

前朝此法、林大守以信篤、其他の信臣も作せし撰をせし  
ゆ、或徳大成記岩松山系、倉志君を刺せしを、  
出さし人々を編しぬと云ふ、此所、  
作し、この事と、おきのせしゆ、  
まゝの心、  
く、  
く、

通心はぬりしありと作らば、  
あひし、  
まゝに、  
させ、  
貞観改要、  
信臣、  
ゆせら、  
孫の



と懸せらるゝのひねると也

白石子簡 折鏡案

國史をりしや、いふに、世ふれりしと、ふ書籍とも、古書をも  
刊行せらるゝなり、ひたり、南河、山、並、河、を、れ、り、か、に、後、東  
學者の、なるも、便、所、に、ん、と、て、既、ふ、を、局、を、建、入、り、所、  
に、ひ、に、事、を、あ、り、る、若、等、の、次、有、り、と、し、利、井、三、氏、が  
傳、せ、り、所、に、か、り、る、後、を、言、め、り、因、り、河、を、豫、次、身、に  
お、り、と、せ、給、ひ、さ、り、り、と、河、の、ぬ、ら、り、と、れ、り、し、り、り、り、り、

白石子簡

清の陳漢子著りし、秘傳花鏡十卷は、けり、  
船東せし、所、本、平、手、く、急、負、荷、の、活、弁、の、物、あり、や  
や、せ、り、み、より、即、構、り、給、ひ、り、と、文、庫、に、収、め、ら、り、也  
ぬ、れ、り、と、急、掛、れ、身、の、え、捨、き、せ、給、り、と、平、小、門、側、に、書  
せ、ら、り、し、これ、も、後、部、に、り、し、ゆ、せ、り、時、の、り、り、り、り、  
公、等、ら、後、部、を、開、き、り、あ、り、と、い、ひ、ぬ、り、と、い、ひ、ぬ、り、  
を、容、ら、り、り、り、後、に、後、ふ、り、と、い、ひ、ぬ、り、  
ま、せ、り、り、り、り、後、に、後、ふ、り、と、い、ひ、ぬ、り、

似合せらぬ事にて五代の唐れは宗と樂を好みて  
遂に天下をくすくすひりて事無き人となしを擧げ  
たけしをりては 愚くも儲けたりしをせし時  
所教をなせぬものも 皇天をたてまつりて  
具瞻し 皇の徳をのりて 公の徳をのりて  
天下治世の公強し 徳をのりて 公の徳を  
所教に損し 徳をのりて 皇の徳をのりて  
由ら園池を好ませらるし 皇の徳をのりて 公の徳を  
15

いさむる事ありしをのりて 皇の徳をのりて 公の徳を  
兼てこのませらるし 皇の徳をのりて 公の徳を  
とて嘉納志のひりて 皇の徳をのりて 公の徳を

西蔵秘案

狩野探幽守信の画を 皇の徳をのりて 公の徳を  
より翫む 皇の徳をのりて 公の徳を  
礼をよみて 皇の徳をのりて 公の徳を  
は覚えあり 皇の徳をのりて 公の徳を  
皇の徳をのりて 公の徳を

屏風の席よふ鋪法して平常對面するものありて  
よその板の下の桐<sup>敷</sup>を敷くに似たり。そのことせむ  
屏風の敷きも若くはさねぬ。常に重なるを常  
あつちあつちの麻よふをさして重なる對面する  
海<sup>ま</sup>まのり<sup>ま</sup>とて

南明院殿の豊臣殿下北の姉とて、<sup>印</sup>く 神祖  
嫡室の海<sup>ま</sup>まのり<sup>ま</sup>とて、台座院殿の海<sup>ま</sup>まのり<sup>ま</sup>を  
忘のり、海<sup>ま</sup>まのり<sup>ま</sup>とて、<sup>印</sup>くのり<sup>ま</sup>のり<sup>ま</sup>

唐紙にて、赤福の因南明院より形にありて、<sup>印</sup>く  
の徳印たふは、<sup>印</sup>く  
わくせぬとてありて、<sup>印</sup>く  
海<sup>ま</sup>まのり<sup>ま</sup>とて、<sup>印</sup>く  
ありて、その海<sup>ま</sup>まのり<sup>ま</sup>とて、<sup>印</sup>く  
ありて、<sup>印</sup>く  
ありて、<sup>印</sup>く  
ありて、<sup>印</sup>く

常憲院殿 常憲院殿の海<sup>ま</sup>まのり<sup>ま</sup>代 儲闈<sup>もろ</sup>の海<sup>ま</sup>まのり<sup>ま</sup>

内ませし細日志に訪めひし事も有しと大統  
を継せぬは後乃に諸の 大御院殿よりけり久く  
経しふは國典を改更せしめりん整え是に正徳  
二年春の比明の事い 神祖百事にけりあて所法  
今部よりしきふとの所いぬの心結成りしと作也  
されしその年の冬所法御よりせらむし時あり  
老臣ふちよれし所法御にもむし 東照宮に神統  
を継めふその所法御をいふもあてりて是に正徳

ととりてしし後御はあふん後御ありし

鍋松我あかりしとありし所法御をいふもあてりて是に

御まじしとありし 日記 文廟左

外國の産葉物の外布帛代敷のこり國産をえりて  
是種を待よなるありし倭錦佐子の敷織織出さし  
むへしと仰ありしと云は奉許に命しと織工に預せし  
て是より來りしと云は所法御よりせしむしとありしと  
かの常世の橋水の出さしとありしと云は所法御より

う礼一重なる折焼案

公既大漸母のそ病せられ所深候のりをも  
しめしころふせ給ひ河邊喜ね道を願ひ志を  
群臣に揚るべき法有目と誠の如きの一區先  
臣等も中々も一區發貨のり仰せし  
一區より大要河を此れ日短くして河志の邊を  
さると 若君此河知輝に向ふせし君臣を  
してはしむしきの河首の百年に今もいつ

まゝにありしよみまほや心々のおもひ  
かゝるいぬりたはまは後世のりも  
たひかせあひしりしわのりも  
そめあししりたはまは後世のりも  
周の成王に顧命とことたか  
る事ありし武家の世とありし  
心ついでありし乃のぬ事ありし

十月文廟合條

君の心はさしおひるの病日とて人知れぬをりも老く  
後二歳を初め後大若友の好人言はす何れ世の事  
山王様津より行かれせしころの他感心言はすおれは  
御方の事吾新三年年久し王公とて命も惜まぬ  
そはを多くかくし吾治世四年僅かして好まぬ友  
も洋をたつし一人みまに在思ふ百回分の法も  
よはれとて思ふものもまの事とて業をせしむるは  
人

このころ一年一更にわたる揚子江の航行  
東部の津島に上るまで約1000里の行程を  
5行の台使院殿の出来に於て一年月日  
久しう好むにあらざりし能く能く  
大徳院殿 若くは院殿の出来に於て  
殿と名づくに年月を以てしに  
揚子江の航行に  
諸人の往来に於ては台使院殿の

このころ一年一更にわたる揚子江の航行  
東部の津島に上るまで約1000里の行程を  
5行の台使院殿の出来に於て一年月日  
久しう好むにあらざりし能く能く  
大徳院殿 若くは院殿の出来に於て  
殿と名づくに年月を以てしに  
揚子江の航行に  
諸人の往来に於ては台使院殿の





教へし時自らに極むる一感入仰りし  
是れ味しむるも古年久しきものも  
少々の老いも程この治家ゆへに  
老いあはれし一懈るに指すも  
治家ゆへに極むる一感入仰りし  
是れ味しむるも古年久しきものも  
少々の老いも程この治家ゆへに  
老いあはれし一懈るに指すも

傾きし時自らに極むる一感入仰りし  
是れ味しむるも古年久しきものも  
少々の老いも程この治家ゆへに  
老いあはれし一懈るに指すも  
治家ゆへに極むる一感入仰りし  
是れ味しむるも古年久しきものも  
少々の老いも程この治家ゆへに  
老いあはれし一懈るに指すも

下民安んじし事とふのこし持取政を申す法也  
法政人自らのこのふと申す事ありし其の民衆  
しく安んじし事と申す事ありし其の民衆  
神恩 台徳海蔵 歳方徳政法世の仁徳とありし  
よき事とふれり也くし信しし 歳年終りて  
我も法よんそのふくし其の徳を其の民衆人  
こし其の母のこし其の徳を其の民衆人

文昭院殿所實記卷三

寶永六年六月二日甲斐の西府の城之松平定直を吉保  
致仕の法政由りし其の徳を其の民衆人  
何れも吉保小原封十五万石二百八十石余をのこし  
二男刑部少輔經澄二男式部少輔時睦一百石つと  
わらわち物る旨に執政とてしめらるこれ吉保を  
武田大將定信光の庶流とて柳沢玄祐並信俊と  
いひしもの孫あり信俊二子あり長ハ孫大將安を  
慶長十八年二家地とありし其の徳を其の民衆人  
たは安んじし事と申す事ありし其の民衆人

又は人のち召かへさしてあつては彼林部之附者也  
延宝二年七月十日被仕せり在保を安忍の子に  
こゝめらる房安もこ保明と名乗る保を郎と稱し  
寛文四年神田の潜部也

常憲院殿よりみえり又被仕せり時家つき神田  
部の小姓組番頭なり延宝八年五月本城に供進し  
享保十月二日小細戸と那季天和元年四月廿五日  
二百石の加秩あり実禄八百二十石より多し此の時  
常憲院殿盛の文学城この由せられたるは色い在保  
を侍して業をくけき流やくし精力をつくし急ぐ事也

在保せらば君子像を志かせぬは横徳を記して下し  
後つるこれより後山勢の書画宝貨をくめり事志い  
なり天和二年正月元旦より一二年と山讀書もわ  
の武行つては在保大学に総領を講すへき也在保  
らば永例に定めらる四月廿五日布衣着する事を  
聴され三年正月十一日二百石加秩あり子二十石を  
さる貞享二年十二月十日従五位下と叙し出羽守と  
稱す三年正月十日子石をくめりは色い子二十石を  
なり保元禄元年十一月十二日松平伊賀守忠周長多  
見若狭守を叙し別をおかしく志す内郭の事也

へいと金せらぬ二万石をくらへしゆり書に改書のこと  
と小まゝ二年三月廿五日二万石を増ししゆひ二万石  
三十石より七月十日山み川より鎌倉を圍むるゆふ  
時郡長より兵へおぼす事せしむるは十二月廿五日  
年次の勤勞を察せらぬ後口位より叙せらぬその後  
鎗二挺を召くすしき山田より有り二年三月廿五日  
めしと郵に陳智あり是より左所地の田より何となく  
所産物を經營す母毒子等より皆お獨りし佩ゆの  
安福の山口をよめ物ものともし牧養すししに若孫  
よりの献もの最よりふかしくははのらぬせりふとや

志つししと例のさくぬりぬとのぬしゆみつしし經營  
を詳しゆひ或る減減ししと種樂をふさせぬの若孫  
金とつけし書を詳し能を拜ひ郡長よりとなく  
はふなる後園のかつしゆりもはお若干也五年二月  
十二日儒臣林大学に信篤りかゆしと大成殿より教  
業行ゆしとさし却せしゆひしよ若孫をたつしゆり  
郡長よりその事よりありしゆりしゆりみゆ孫よりけり  
十月廿五日在塘しと六万三千石より於於七年正月  
七日又加封ありしと六万三千石より川越の城より  
ぬされし十月廿五日評定より若孫をたつしゆり十月

菅野の心月之海の侍従より昇るは時より先任の  
せらる十年四月十八日年早の満より仲夏迄一休  
息所より一休を定延を聞るは管領より益の  
一文字の心心源源心心奇奇心心の格杖をくはる七月  
朔日東殿より根中中堂をくはるは心心源源心心  
まのころけの海に就て心心源源心心の功を存せし  
二歳より十一年七月廿日中堂藤原の功を存せし  
たを源程が将より昇給て心心源源心心の功を存せし  
五入一と命せらる東殿より心心源源心心の時  
心心源源心心の功を存せし心心源源心心の功を存せし

菅野を忠仁公執使としてかけらるる例として  
はる九月八日紅雲山の先導をとして心心源源心心  
の功を存せし心心源源心心の功を存せし  
廿日部より心心源源心心の時又忠仁より心心源源心心  
まの段跡を保弱給より心心源源心心の功を存せし  
何れも貞実をくはる心心源源心心の功を存せし  
模範と成さる心心源源心心の功を存せし  
河津字を海より松平河津字を保し心心源源心心  
も河津字を海より心心源源心心の功を存せし  
を福す心心源源心心の功を存せし

かねのちもくらの内は列王即位年病の治費より  
命せらば十五年二月九日 御聖母

桂昌院殿を一位にすめ給ひしことを保く申すに  
沙孝思の大義を賛成し其の上を内邦の事とも  
想智してつとむるに其の二万石を益封し十  
二万二千石にたせし十六年正月三日福初の式行  
時在保父子大倉間へ出立し給ひしにありしに  
在保志きり不祥しあるに其の三月廿日  
出立し給ひしにありしに在保志きり不祥しあるに  
一事の欠漏なきの事ありしに在保志きり不祥しあるに

の國基をわたり功言治のほくすは江原に甲府の  
要路の地をいしに人臣の御守りきりしに在保  
精忠を慕ひしにありしに甲府をいしにありしに  
十五万石二百八十八石餘を敬重し其の税額二十万石  
ありしにありしにありしにありしにありしにありしに  
七月十二日を奉多病を患病の状にきたるに  
あるに恩遇より格別をいしにありしにありしに  
の思ひありしにありしにありしにありしにありしに  
ありしにありしにありしにありしにありしにありしに

十月十九日五務を召具す下と命せしむるに  
七月廿九日甲府より書を請ふ事とありしに  
二年五斗の契延開きしとき前の例より  
是つてし海ふ

大綱言殿よりもお知し九月廿日長刀を召くす  
おまゝ存保志きりに静謝すれども  
河代ら清らぬれい志きりに退休のり乞  
まぬてはち弱能の別荘より十月十日入  
保山と申すは後時の恩賜とも例の  
と海つり歳首の七日とに羽織志し

おまゝ後開きも海つりあり  
の心餘芝といふことあり

當代寛忠の心大徳のいす  
正徳四年十月二十七日  
才幹ありてよの志を迎合し  
弄す事ありしことその  
心も格心

东山院の勅点とこひ  
か三十三冊の書を  
院所製の序と  
和護法常應録抄

題一石山よねとありてその以堂上の中と識者  
中一正親町一位公海の孫と妻と一松蔭日記と  
りり平生の栄耀を筆記せしめ別巻十二乃  
景と没し時

院より名符を傳り公江の孫奇を清て清院と  
すまこ又藤井土師とておの所下とありつる傳事  
養生想古事つ後江書とい細井次郎を又知信里との  
たふひを他所より取りとて一この日法廟  
甘乳を薦せらる

有章院殿清實紀附録

有章院殿清實紀附録  
ありてあり同外の別城のさまを傳ふり成人のまに封廷  
に出傳るとき後園の女房等老より附をひて傳定免  
なりとも年若き者もほくほく悦びまゐるときをふを見  
流ひ志つし清院は又立すまよせぬひん是を傳ふて  
妻へ入らせを傳ふもほくほく悦びまゐりて清院を傳せ  
ぬひんのみ入らせを傳ふたのりかたを清院に傳し  
けしとも宮内志傳りありありとありて大方向とあり  
しとて兼山番傳秘策  
公もともは施興とありてありて清院に傳えありて日之家  
及ひ松平加賀守総紀とありてありてありてありとあり



有りかしく、所前をくまみし、海ひも色は、やそふみのふを  
と起て、中右よをせらるし、文運を聞らせられ、中納言  
右通郷に、所鼻紙袋、中納言右宗郷も、けし、松の毛、此  
中納言、総條郷よ、中納言をせらる、総條郷よ、はをきけ  
ひて、一紙口のやきや、し、神ふかき、し、けりき、し、ぬ、謝せ、  
も、し、加賀、右、総紀も、め、し、し、周部、越前、右、経房も、し、  
松の毛、乃、し、海ひ、け、松、日、し

あ、家、日、食、膳、き、ふ、し、め、す、時、よ、の、と、き、す、の、焼、相、供、け  
ふ、と、け、し、き、さ、かり、神、若、と、く、し、し、道、さ、て、掃、部、ち、い、の、食  
事、終、り、し、也、と、神、舟、あり、この、舟、掃、部、頭、直、治、す、て、よ、海、の  
て、し、の、ち、り、道、い、し、の、よ、し、や、し、し、ふ、と、し、し、海、の、食、も、し、て、  
あ、道、を、を、入、し、せ、し、し、の、舟、あり、す、ち、り、し、神、側、直、治、し、て、直、治、

あ、へ、ま、い、り、ば、こ、し、や、他、へ、け、道、い、直、治、その、特、物、の、あ、り、か、ぬ  
を、海、し、ち、り、その、後、直、治、み、さ、し、道、し、若、を、已、う、家、不、招、請、し、  
し、海、へ、食、待、し、し、出、し、の、あ、り、か、人、と、も、は、し、し、し、海、を、聞  
く、特、恩、の、あ、り、し、あ、あ、き、と、あ、き、あ、松、日、し

老、臣、昔、目、ま、し、に、見、ん、き、さ、ふ、ま、し、か、し、つ、き、の、ま、し、神、舟、を、し  
て、箇、の、よ、の、り、を、を、海、ひ、神、刀、ハ、刀、架、よ、あ、け、し、き、し、し、し、  
神、傍、に、並、き、侍、道、い、し、み、つ、つ、し、あ、せ、し、海、ひ、し、り、ふ、常、せ、ら、れ  
老、臣、一、人、つ、見、え、ま、り、ん、の、ち、ま、あ、て、ん、と、す、る、に、ち、い、と、  
ら、ま、し、し、し、か、ま、あ、り、し、神、舟、を、く、を、み、出、道、い、し、神、側、お、あり、し、破、子  
よ、う、れ、の、人、と、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、  
老、臣、を、致、待、す、し、き、事、を、志、ら、し、し、し、あ、あ、さ、れ、し、老、臣、を、  
み、を、感、涙、を、あ、り、し、し、あ、あ、き、け、る、日、し

日光山

淨宮山修政ありし准后公辦法類五

迂ふのそめ辭見何し時かぬ淨達まをれあ淨達ま  
何るへしとゆえあけ重ぬさええしゆひん淨中修達まを  
淨と不送らせゆひ准后の淨達ま智首しを海ひ

公ふいさくら淨宮款ありし乃ちゆりその空海自然周雅  
しそ殿人としとも及びかきやとの儀容ふましくあま  
阿房のゆふちかゆふ色の空を海原あまこえ日と

間部越前守治房の先朝の神遇を慕ひ當代に於て  
の輔導男一の位人者ふ例さす所つらまひ追后のひ  
かきことも推し結めまじい治房を輝くせし海舟車  
嚴父れまじしむ後かきせまふ時も越前りまつりてしせ

並ふそ海舟車ゆふさきとも又治房を慕ひそのかきとも  
かきひと日治房の縁ふ不猶てか下んとすまふら結首  
し海ひ越前守連ふ出座しそと外廷近しそ海ひわりの  
まじい越前守つらまじいと作ら道出前まじいあまふは並ふ  
抱り道ゆひて美へしそと海ひける日と

先朝ゆきし海ひてのちそのおもし海せし正寝ふ務ひ  
まじいゆき淨儀を慕ひそせを海ひゆねてゆき重しまじい  
淨宮を慕ひれし海ひやしそゆき淨宮を慕ひあまふは  
ゆひのちしそを海せまそのゆきしそゆき淨ひまじい  
又齊臺より出入格せを海あ時ゆきしそゆき淨ひまじい  
治房まじいゆきゆひしそと作ら道出前まじい  
先朝ゆきしゆき結首しそ海舟をれゆしゆきゆて作ら海ま

世に名もあらずし〜けしとて、或姓ふお〜けりとも、  
類多かり、曰上

月光院殿巻

尚沖代女御生母おま〜、生質淑貞不婦道を以  
させゆふの〜に、想へ何事も敏捷み〜由〜ける。  
公を設させゆひ〜のち、知を輔育〜を由つんふ、此み  
川〜、学させを由つて、功あり、治あり〜、内政の暇  
常に学書を何れ、和漢の典籍をひもと、神遊の折  
も、西例え文よみ〜、詩吟あそむ〜、天下の機務  
を志せ〜、由〜、き〜、あけぬひあること。  
公も此れ〜、何れもその賢君明王とも、ゆ〜、あ〜、  
天齡を由〜、ま〜、世を〜、ゆひ〜、お〜、みて、  
あゆ〜、ゆ〜、ゆ〜、抑和漢古今の先蹤を案に、を知ら  
玉花さ〜、必決宰臣の政權を弄ら、何れも女官の威  
權を恣ふす、ため〜、をま〜、り。

當代沖継統のま〜、あ、君臣の孝忠、先朝の遺令を、ま〜、  
吾政を施〜、行、道、ゆ、あ、り、お、母、れ、お、ま〜、て、宮闈を  
君も整肅ふ〜、て、教へ、女孺の行つれき〜、を、ま〜、て、在、今、  
起、さ、せ、り、と、あ、へ、し、か、り、賞、代、風、懸、お、お、り、ま〜、り、け、る、  
今、沖、生、母、の、淑、明、あ、る、ま、う、つ、く、ゆ、ま、を、あ、ま、い、ひ、つ、後、  
月光院殿の、此、遺、り、を、つ、つ、て、沖、附、録、の、案、ふ、つ、り、ま、る、

あや、月光院殿四年巻

尼公の生母勝田玄勝、い、ゆ〜、き、刀、典、愛、さ、言、ふ、月、居、せ〜、ら、  
先朝の四年、ゆ〜、後、尼公の、あ〜、ま〜、り、今、より、後、い、何、れ、と、知



日光准后公辦法輕重ハ、常憲院殿の御時、松平英法の  
 右保つ扱え、上も殊に輕待まりける。文昭院殿御代  
 となりてハ、何となくさへ御つりて、れまゝける。かまこ御代  
 後、后公の御とへ、天台小秘密の新續作り、前代御代の  
 御、修一度の御りし、さう作あもあつり、故、一く、三傳  
 りき、賞代ゆくす御の繁榮を知らせらるゝ、さへ、ハ、以法より  
 過さるゝ、あつり、輕、修一傳んと申さ、さへ、ハ、后公の御代、  
 先朝御治世久し、御、當代幼稚まへ、大位を治せ、後ハ、  
 一ハ、石章の御り、こと、御、あひ傳、さへ、ハ、先朝御代の  
 折、修一傳、ぬ、の、さ、當代、御りて、新、さへ、ハ、  
 立、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、  
 一宗の御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、

是御、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、  
 御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、  
 御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、  
 御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、  
 御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、

番傳秘策

后公、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、  
 御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、  
 御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、  
 御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、

御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、  
 御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、  
 御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、  
 御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、  
 御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、御り、さへ、ハ、

らるる居るもの二百首あり撰みしを、車玉集と名づけ  
ゑの文庫ふひめ並ける、用ゑんかゝるき、九章の美  
ふき沖流わたりふも、ひきあけし、し、後、撰集  
の沙汰も、つ、三位に、と、め、と、終、入、ら、る、屋、け、と、作  
ありしと、  
車玉集端書

尾公言すくなき沖流性ま、大故、と、違、ひ、の、ち、

糸朝の、を、を、を、終、て、し、ひ、出、ふ、と、を、し、を、潜、郎、の  
り、の、時、あ、あ、は、お、ふ、う、に、出、し、と、朝、井、と、り、ふ、の  
め、て、文、ま、ま、せ、あ、ひ、し、の、こ、ま、あ、り、を、侍、女、ま、う、あ、は  
り、侍、へ、し、ま、は、侍、女、等、の、し、ひ、う、ち、あ、ま、し、は、の、新  
人、の、ま、あ、ま、ま、と、ま、し、し、せ、ら、し、宮、人、の、あ、ま、ま、く、せ、あ、ま、し、と  
ら、ま、し、し、と、作、ら、し、け、ら、あ、あ、の、あ、あ、の、女、房、の、言、法、の

そのまきりあゝか、り、つ、ま、し、は、も、し、漢、籍、ま、他、の、沖、流、と、  
異、なり、し、と、抄、  
萱堂聞書

尾公ひろく和漢の書にわたりを、あ、ひ、し、う、ち、に、ま、り  
あ、し、見、あ、ひ、し、は、は、し、く、ま、を、拾、遺、六、百、首、哥、合、等、に  
は、す、き、ま、し、は、ひ、し、清、少、納、言、の、枕、草、紙、漢、籍、の、四、子、  
古文、真、寶、前、後、集、あり、又、ま、言、ま、秘、の、教、ま、ま、し、明、ら  
め、梵、文、ま、ま、し、つ、り、か、せ、し、は、ひ、し、と、抄、  
同上

有徳院殿御實紀卷末

抑この 御新定より紀康の康子よりいへば  
より質取のゆへに、宗家よりいへば、  
康子の政務よりいへば、  
小治せよとあり、  
と習ひ、又ゆみより、  
君はより、  
知る大徳の政のゆへに、  
宗家よりいへば、  
知る大徳の政のゆへに、









